

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Rhyme dictionaries and rhyme tables I/II : further discussions

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 太田, 斎, OTA, Itsuku メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2329

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



韻書と等韻図 I / II 補説

太田 斎

弁解の辞

太田斎 2016「韻書と等韻図 II (完)」(以下、II と略称) の草稿は太田斎 2013『韻書と等韻図 I』(以下、I と略称) で予告した段階で既に大凡のところは出来上がってはいた。しかし折に触れ、あちこち手を入れるという牛の涎の如く続く作業になかなか区切りがつかず、ずるずると完成を送らせていた。原稿提出締め切りという制約に自らを追い込んだが、諸事情により、投稿申請から締切までの時間、校正の時間が全く以て十分ではなかった。定稿に至るまで実に慌ただしく、本文中の引用文献の提示、参考文献表示の体例を統一しきれなかった。具体的に例を挙げれば、本文中の引用では著者名の後の刊行年がカッコでくくってある場合とそうでない場合があり、また末尾の参考文献一覧に掲載されているものについては、簡単に済ませているのに対し、参考文献一覧に掲載していないものについては、詳しい書誌情報をその場で示している。書誌情報は纏めて全て末尾に掲載すべきであった。参考文献については、半角と全角のカンマが混在して甚だ見難くなっている。該当要修正箇所が余りに多すぎて校正でも直しきれなかった。挙げている書誌情報そのものには誤りは無いと思うが、何とも見てくれが悪く、読者諸賢には申し訳ない次第である。

概説書のようなものは後になって説明の不備に気付くことが多いということを今さらながら痛感している。結局のところ、この II において、当初 I で予定していた注では不十分であることに気づき、補注を加えたのだが、II を脱稿した後でもまだ不十分な所に気づいた。それで II で「(完)」と銘打ちながら、何とも情けないことに、今回の追補を執筆するに至った。それで本稿は続編ではなく、別仕立ての論文として「韻書と等韻図 I / II 補説」というタイトルで発表することにした。補遺、正誤表はこれで打ち止めとしたいが、これで今後は修正、補遺の必要が見つからないという自信は全く無い。

以下の本稿追補中の引用文献については、既に II pp.236-243 に挙がっているものは、著者名、署名、該当頁を示すに止め、挙がっていないものについてのみ、末尾の参考文献リストに挙げるものとするが、一部重複するものもある。

これを発表するに当たり、査読者から貴重な提言を数多く頂いた。タイトル

を上のように変更したのもそれによる。通常なら論文末尾に謝辞を書くべきところであるが、何分本稿はおまけの注と参考文献、正誤表から成る、落穂拾いのようなもので、通読するような形式になってはいない。本文といえ、この「弁解の辞」しかない異形の「論文」である。よってこの本文の末尾に記して、査読者に心より感謝する次第である。

I 及び II に対する追補

I p.17/3 そうであれば、『韻鏡』の祖本は『指玄韻鏡』、『七音略』の祖本は『七音韻鏡』という名で、並び行われていたことであろう。『七音韻鏡』という韻図

『古今韻会举要』巻頭の案語中に一度だけ『七音韻鏡』という書名が見えるが、詳細不明。その直後に二度、『七音韻』という書名が現れている。そこに見られる説明によれば、『七音韻』の方は三十六字母を用い、見母から始め、日母で終るようになっており、東韻であれば「公空○○；東通同農」（○は有音無字を意味する）のように並んでいると言う。揣摩臆測を開陳するに、『七音韻』と『七音韻鏡』は『五音集韻』と『新編篇韻貫珠集』の関係、つまり対になった韻書と等韻図の関係にあったものではないか。或いは『康熙字典』は韻書ではなく辞書だが、この巻頭にある「字母切韻要法」から始まり、「明頭四声等韻図」、などから成る「等韻部分」のような、巻頭の韻図と韻書本体というような関係にあるものだったかも知れない。『古今韻会举要』も韻図こそないが、巻頭に「禮部韻略三十六字母通攷」という等韻学的性格のものがある。なお『五音集韻』の場合は他に字書『四声篇海』もあるが、『七音韻』と『七音韻鏡』の関係についての推測が正しいとしても、これに加わる字書の存在については全く手掛かりが無い。いずれにせよ、『古今韻会举要』に見える『七音韻鏡』は『七音略』の祖本の名として挙げた『七音韻鏡』そのものとは結び付かないだろう。

I p.148/20 そこで重紐の区別をいう場合に、この配置の違いに基づいて、重紐四等字、重紐三等字というような呼ばれ方をすることがあるが、一般には四等の段に並ぶ方を A 類又は甲類、三等の段に並ぶ方を B 類又は乙類と呼ぶことが多い。 **A 類、B 類と言う呼び方**

龍宇純 1970, p.161 は三等に並ぶものを A 類または 1 類、四等に並ぶものを B 類または 2 類としており、この A, B の用法は一般に認められているものとは逆

になっている。龍宇純 1970「廣韻重紐音值試論兼論幽韻及喻母音值」参照。

I p.159/-10~-6 だから相互の影響関係について、発想を逆転させて、原『韻鏡』で B の方が転図上に現れないので、これより後の時代の切韻系韻書がそれに基づき、B の小韻を A の方に纏めてしまった、そしてそのような改訂が『広韻』に伝えられた、ということも想定可能である。 **幽韻を重紐韻と認めない研究者もいる**

広韻のみに基づけば、重紐の対立を示す小韻は存在しないことになるので、幽韻を重紐韻とは認めない研究者の方が多いくらいである。広韻のみに基づく類相関の調査結果は後述。龍宇純 1970「廣韻重紐音值試論幽韻及喻母音值」は「「休」は「𪛗」小韻中に在るべきものだが、原本切韻で漏れてしまった。それを後の増補の際に処理を誤り、増加小韻扱いされることになってしまい、曉母小韻に関し、見かけ上の対立が出来てしまった。広韻の処理こそが正しい」、と述べている (p.177)。これによれば、幽韻は重紐韻ではないということになる。但し、本稿ではこの説には従わず、重紐韻と見做す立場をとる。

I p.203/16-17 結局、声調によって帰類のパターンが異なるということのも考え難いことであるので、平声、去声の状況から見て、上声の場合に関しても牙喉音の3字を全て A と判断すべきだろうということになる。 **幽韻上、去声小韻の類の帰属**

既に II p.225「補注 203/-4 混乱してしまうのである 【補注】**広韻反切のみに基づく幽韻の類相関**」で述べたように、各小韻を反切系聯法のみに基づいて A,B の帰属を判断しようとする限り、上声、去声の類相関を明らかにできないのだが、相配する平、去声との間の又音の兼収状況に A,B 類の帰属に関して違いは無いという前提が成り立つならば、これを利用して上声該当小韻の類の帰属を決定できる。例えば広韻では

平声幽韻

影母小韻「幽：於糾」

「洵 澤。在崑崙山下」 ——
「恟 《説文》憂兒」 ——
(「呦 鹿鳴」)「歛 上同」 ——
「𧈧 𧈧𧈧。龍兒。又一糾切」 ——

上声黝韻

影母小韻「黝：於糾」

「洵 崑崙山下澤也」 ——
「恟 憂兒」 ——
「歛 愁兒」 ——
「𧈧 𧈧𧈧。龍兒」 ——

群母小韻「𧈧：渠幽」

「𧈧 𧈧𧈧。龍兒」

見母小韻「𧈧：居糾」

「𧈧 《説文》云，高大(>𧈧)也」

群母小韻「𧈧：渠黝」

—— 「𧈧 𧈧𧈧。龍兒。渠黝切」

—— 見母小韻「糾：居黝」

「𧈧 《爾雅》曰，𧈧者聊。又居幽切」

といった又音が見られる。このうち「𧈧」と「𧈧」以外は義注も一致する。「𧈧」－「𧈧」は異体字の関係にあるとみて良いだろう。II p.225 の p.203/-4 に対する補注で広韻のみに基づく類相関の検討結果は、A 類は去声の影母、群母字のみで、他は全て B というものであったが、今ここでは広韻と他の切韻系韻書は同質の音韻体系を反映するものと見做す。これまでの検討では原本切韻において平声の如上の小韻は全て A ということであった。この結果からすると、原本切韻では上声の小韻も A ということになる。

実際には、既に指摘したように広韻の類相関は他の切韻系韻書と異なるところがあるので、このような原本切韻と広韻を同一視するやり方に果たして問題は無いのかという懸念は残る。それでは広韻に頼ることなく、他の切韻系韻書の又音兼収情況に基づいて検討するとどうなるか見てみよう。切三ではこのような又音の兼収は見られない。王一では

平声幽韻

影母小韻「(欠損)」

「𧈧 𧈧𧈧。又於糾反。亦作𧈧」

の 1 例のみ。

王二では

平声幽韻

影母小韻「幽：於糾」

「𧈧 澤。在崑崙山下」

「𧈧 憂兒。又於聊反」

「𧈧 𧈧𧈧。龍兒。又於糾反」

上声黝韻

影母小韻「黝：於糾」

「𧈧 𧈧𧈧。又於口反。亦作𧈧」

上声黝韻

影母小韻「黝：於糾」

「𧈧 崑崙丘下澤名」

「𧈧 憂心」

「𧈧 𧈧𧈧。又於由反。亦𧈧」

となっていて、広韻と比べると該当例は少ないものの、平声－上声間の類の相関に関わる又音の兼収情況に異同は見られない。つまり先の広韻を用いて得られた原本切韻の「上声の小韻も A」という推定は、他の切韻系韻書を用いても動かない。広韻と他の切韻系韻書の間で類の帰属に大きな違いがあるというのは、広韻が二つの曉母小韻を合併したことにより、反切系聯の結果が、全体に影響を及ぼして大きく違うことになっているのであって、この問題を除外して

重紐各小韻を見れば、広韻と他の切韻系韻書の間で特に類の帰属に違いが見られるという訳ではないのである。既に指摘したように、又音は切韻系韻書に反映する音韻体系と異質なものである可能性があるが、ここで取り上げた又音は以上に示す如く字義が一致しており、一先ずは声調のみの違いと思われるので、A、B の帰類についても一致するものと見做して大過ないだろう。

I p.211/-5~4 (董同龢^おの説。『上古音韻表稿』1944;1948, pp.102-104 に見える)

董同龢の所説をごくかい撮んで紹介すると、上古の刪 an—鏗 at、山 ān—黠 āt が南北朝期に至って、前者がそのままだったのに対し、後者は大きく変化し、山 ān>an=刪; 黠 āt>ət=没となって、鏗が刪と山の双方を承けるようになったのが、混乱を生み、27 刪—14 黠、28 山—15 鏗と入声韻の配列の逆転に繋がった。王二の配列はその混乱を示すもの、ということである。

なお董同龢『中国語音史』1952, p.45,61、『漢語音韻學』1968, p.85,103 のいずれにおいても 27 刪-14 鏗; 28 山-15 黠と入声の順序を入れ替えて相配させているが(27 刪-15 鏗; 28 山-14 黠ではない)、それについての説明はない。番号は附されていないが、前者 p.104、後者 p/171 でも同様の措置が採られている。

I p.249/-10~9 上記の齊韻の章組字及び哈、海韻の章組字を祭韻に相配する平、上声と見なす説もある。 **祭韻に相配する平、上声**

森博達 1982「武玄之「韻詮」の岑韻について」はこれに関する議論を以下のように簡潔明瞭に纏めている。結構長いがそのまま引用する。「さて、移韻が中古音系において占める位置については、祭韻の平声に相当するという説が有力である。管見によれば、この説は周法高氏『玄応反切考』を嚆矢とする。周氏は、『玄応音義』の移字の音注「是奚反」に関して、移・鬱二字の『切韻』における反切を引き、『韻詮』「五十韻頭」・『古文四声韻』・『魏鶴山集』を引用し、「照通例四等韻例無日、禪紐、而齊韻有之、此蓋寄韻也。亦有別為一韻者、齊韻擬音為 *iei*、移韻則為 *-iei* (平聲) 与祭韻擬音之 *-iei* (去聲) 固不相衝突也 日訳: 通常だと四等韻には日、禪母は無いはずなのに、齊韻にはそれがある。恐らく寄韻(類音関係にある別韻に間借りすること)なのだろう。また分けて別の韻とするものもあり、(その場合、) 齊韻の推定音価は *iei* だから、(齊から切り離して独立させた) 移韻は *-iei* (平声) で、祭韻の推定音価 *-iei* (去声) と(声調が異なるので) そもそも衝突することはないのである」(pp.81-90) と述べている。

ついで、董同龢氏『中国語音史』はさらに視野を拡大し、『廣韻』の哈韻に収められている昌母字（𪛗）、海韻の昌母字（𪛗）と以母字（𪛗）、そして齊に収められている常（禪）母字（𪛗）と日母字（𪛗）を取り上げた。董氏は、これらが、一等韻たる哈・海韻や四等韻たる齊韻に収められながら、三等韻専用声母字を反切上字とする特殊な例であることを指摘し、韻図上での位置や等韻門法の「寄韻憑切」・「日寄憑切」の二条によって、「可知他們當是與祭韻相當的平上聲字，因字少分別寄入哈海齊三韻，而借用那幾韻反切下字 日訳：それらは恐らく祭韻に対応する平声、上声であり、該当する字が少ないので、それぞれ哈、海、齊韻に間借りさせ、それらの韻の反切下字を借用した、ということが分かる」と説いた。つまり、去声祭韻の平・上声相当韻が、所属字数の僅少さのために、『廣韻』などでは独立した韻部として設置されず、哈・海・齊韻に寄韻されているという訳である。

董氏の弟子龍宇純氏が董氏の指導をうけて著した『韻鏡校注』や董氏歿後の「例外反切的研究」にも、同様の見解が見える。（以下略）」（pp.83-84。森論文からの引用は以上で終り）なお、引用されている中国語に附した日訳は太田が加えた。

ここに現れる参考文献を同論文末尾の注により抽出して、以下に列举する。但し太田が些か補足したところがある。なお董同龢説は改訂版の董同龢 1968《漢語音韻學》，台北，王守京(董同龢夫人)發行，330p.の p.109, 16-21 行目に極僅かな違いがあるが、同じ表現で現れている。

周法高 1948〈玄應反切考〉，《中央研究院歷史語言研究所集刊》20 本上，pp.359-444

董同龢 1955; 1973《中國語音史》，中華文化出版事業委員會，190+4p.; 華岡出版部影印，

《鶴山先生大全文集》(四部叢刊)，卷 56

龍宇純 1960; 1969《韻鏡校注》，藝文印書館，318p.; 第三版 1969

龍宇純 1965〈例外反切的研究〉，《中央研究院歷史語言研究所集刊》36 本上，1965.12, pp.331-370

II 注(5) p.147/-9~-5 入声韻は……特に山攝諸韻の後の梗攝、咸攝、宕攝、曾攝、咸攝と続く配列順は実はかなり乱れていて、相配する平上去声と対応するような順序には並んでいない。 入声韻に見える四声相配の乱れ

遠藤光暁 1989;2001「『切韻』の韻序について」は、現在、配列が混乱してい

と思われる入声韻は、本来は陰韻尾韻と相配するように並べてあった。それが何らかの理由で、平、上、去声の韻目の配列を現行のように改めたのに対し、入声はそのままにしたので、舒声-入声の相配に混乱が生じたとする (p.304(113); 50-51)。今、先ず原本切韻の韻目の配列を入れ替えることをせず、舒声は平声のみを挙げ、入声と対比させて示す。末尾に十六摂の名称も挙げる。入声との対応関係を見るということであるが、参考までに去声のみの韻も挙げておく。乱れた部分は平声韻の所属する摂と入声韻の所属する摂が相配関係に無いものについて参考までに——で結んで両者を挙げている。両者が対応関係にあるということの意味している訳ではないので注意されたい。

原本『切韻』（上田 1975 推定）

平声	去声	入声	撮
1 東		1 屋	1 通
2 冬		2 沃	
3 鍾		3 燭	
4 江		4 覺	2 江
5 支			3 止
6 脂			
7 之			
8 微			
9 魚			4 遇
10 虞			
11 模			
	12 泰		
12 齊			5 蟹
	14 祭		
13 佳			
14 皆			
	17 夬		
15 灰			
16 咍			
	20 廢		
17 真		5 質	6 臻
18 臻		6 物	
19 文		7 櫛	

20 殷	8 迄	
21 元	9 月	(→7 山)
22 魂	10 沒	
23 痕		
24 寒	11 末	7 山
25 刪	12 黠	
26 山	13 鎋	
27 先	14 屑	
28 仙	15 薛	
29 蕭		8 效
30 宵		
31 肴		
32 豪		
33 歌		9 果
34 麻		10 假
35 覃	16 錫	16 咸（一等韻）——入声 12 梗
36 談	17 昔	16 咸（一等韻）——入声 12 梗
37 陽	18 麥	11 宕——入声 12 梗
38 唐	19 陌	11 宕——入声 12 梗
39 庚	20 合	12 梗——入声 16 咸（一等韻）
40 耕	21 盍	12 梗——入声 16 咸（一等韻）
41 清	22 洽	12 梗——入声 16 咸（二、三等韻）
42 青	23 狎	12 梗——入声 16 咸（二、三等韻）
43 尤		14 流
44 侯		
45 幽		
46 侵	24 葉	15 深——入声 16 咸（二、三等韻）
47 鹽	25 帖	16 咸（三、四等韻）
48 添	26 緝	16 咸（三、四等韻）——入声 15 深
49 蒸	27 藥	13 曾——入声 11 宕
50 登	28 鐸	13 曾——入声 11 宕
51 咸	29 職	16 咸（二、三等韻）——入声 13 曾
52 銜	30 德	16 咸（二、三等韻）——入声 13 曾
53 嚴	31 業	16 咸（二、三等韻）
54 凡	32 乏	16 咸（二、三等韻）

韻書の場合は各声調に所属する韻目数が同じでないために、どの韻目とどの韻目が相配しているのか必ずしも自明という訳ではないが、入声韻が存在しない陰声韻尾韻を取り除いて考えれば、鼻音韻尾平声 28 仙—入声 15 薛までは入声の 6,7 と 12,13 が入れ替わっている以外は、対応する順番に並んでおり、撰に關しても 21 元を除けば、撰毎に固まっている。これに対し、28 仙—入声 15 薛以降は四声相配の關係が大きく乱れて、撰毎に見て必ずしも固まって並べられてはいないことが分る。これを四声相配するように平声に合わせて入声の配列を改めた原本切韻一覧はⅡ pp.148-149 に示した通りである。これでも撰の分断配置は解消されない。

遠藤 1989;2001 は定稿となる前の原本切韻においては『文鏡秘府論』所引沈約『四声譜』のような入声を陰声韻にも対応させる配列だったのではないかと云う。今、28 仙—入声 15 薛以下の部分に限って推定される平—入の対応關係を示すと、以下のようになる。引用に当り、p.305;50 の対応表に、平声の韻目の順位、各韻目の声母の情報、広韻に見える反切、そして平声、入声の所属撰（十六撰）名を加えた。参考までに平声、入声の間で声母が一致している場合は＝、一致しない場合は≠で示している。

平声		入声	撰
29 蕭 eu (s-)	=	16 錫 ek (s-)	8 效——入声 12 梗
蕭：蘇彫		錫：先擊	
30 宵 ieu (s-)	=	17 昔 iek (s-)	8 效——入声 12 梗
宵：相邀		昔：思積	
31 肴 au (fi-)	≠	18 麥 ek (m-)	8 效——入声 12 梗
肴：胡茅		麥：莫獲	
32 豪 au (fi-)			
豪：胡刀			
33 歌 a (k-)			9 果
歌：古俄			
34 麻 a (m-)	=	19 陌 ak (m-)	10 假——入声 12 梗
麻：莫霞		陌：莫白	
35 覃 am (d-)	≠	20 合 ap (fi-)	16 咸（一等韻）
覃：徒含		合：侯閤	
36 談 am (d-)	≠	21 盍 ap (fi-)	16 咸（一等韻）
談：徒甘		盍：胡獵	
37 陽 iaŋ (j-)	=	27 藥 iak (j-)	11 宕

陽：與章		藥：以灼	
38 唐 aŋ (d-)	=	28 鐸 ak (d-)	11 宕
唐：徒郎		鐸：徒落	

遠藤 1989;2001 は、「四声相配する韻目の間で韻目として用いられる字の声母が一致するようにしようとする場合が多く、一致しない場合は四声相配する韻の間で該当する同じ声母の小韻が無くて、声母を揃えることが出来ず、已む無く他の声母のものを韻目とした、そしてその場合でも重韻の関係にあるもの同士で声母が揃うような配慮がなされている」、という魏建功の「切韻韻目次第考源」、『北京大学学報（人文科学）』1957 年 4 期, pp.69-83、「切韻韻目四声不一貫的解」, 『北京大学学報（人文科学）』1958 年 2 期, pp.45-67 の指摘を踏まえて、上掲例においても平声-入声の間で韻目字の声母が一致することが陰声韻と入声韻を相配させていたことの名残であるとする。これによると、31 肴-18 麥、34 麻-19 陌は入声が同じ梗攝所属二等重韻の関係にあるのに対し、平声は前者が効攝、後者が仮攝と攝を異にすることになる。そして平声の配列順がこのようであると、入声については梗攝所属韻が果、仮攝によって分断されてしまうことになる。これについては上掲一覧表には挙げていないが、歌、麻韻が明確に対比されるようにするためには、入声韻の方もこれに合わせ、一等韻 33 歌-28 鐸、二等韻 34 麻-19 陌とせねばならない。果、仮攝韻がこの位置にあるのであれば、梗攝が分裂するのは恐らくやむを得ない措置だと言えよう。これについては 32 豪が上のように対応する入声を欠くが、果攝は歌-鐸となっているものと仮定して、33 歌と 34 麻-19 陌をひっくり返せば、入声における梗攝の分断は回避されることになるし、一等韻の 28 鐸が直後の咸攝一等韻と連続することになるが、それを支持するような実例は見当たらない。33 歌が対応する入声を欠き、34 麻が対応する入声韻があるというように果-仮攝の間で一方のみが相配する入声を持つというのは想定し難い。33 歌-28 鐸というような対応関係は『四声譜』に見える。但し七音略だと鐸韻と相配する陰声韻は 33 歌ではなく 32 豪であり（第 25 転）、果攝の転図に鐸韻字は見えない。もし七音略のように鐸韻が歌韻ではなく豪韻と相配関係にあるとなると、これによりやはり入声梗攝が分断されることになる。七音略に見える陰声-入声の相配例は他には見られず、元々は他にも陰声-入声の相配例が存在していたのに、取り除かれて、何故か第 25 転の効攝-宕攝入声の例だけが残ったと思われるので、除去された中に果-宕入の相配例もあった可能性はゼロではない。そうすると、33 歌-28 鐸、32 豪-28 鐸と同じ入声韻が連続して二度現れることになる。これらを上掲一覧表で挙げていないのは、遠藤 1989;2001 の意図が入声の配列順を説明することにあるか

らである。このような点を考慮の対象外としてもなお宕摂の 27 藥,28 鐸が 21 盍の次に来ることになって、上掲一覧表の入声配列は原本切韻と一致しない。これについては本来舒声韻も咸摂、深摂所属韻を固めて並べていたが、切韻編纂時に咸摂、深摂所属韻の後に位置していた宕摂所属韻を舒声韻だけ咸摂一等重韻の直後に移したのだらうという (p.304; 50-51)。

勝手な憶測を進めれば、『韻詮』では 34 麻は「家」という韻目になっている。或いはこの部分、以下のように平声一等 33 歌と二等 34 家の間で韻目の声母を揃えていたかも知れない。ならば王二が庚韻に相配する入声韻の韻目を「格」としている(庚-梗-更-格)のは四声相配する韻目を同一声母で揃えるという意図が働いたということは言うまでもないことだが、王二独自の庚韻相配韻目の改変という可能性の他、何らかの韻書における陰声-入声の相配の面で仮摂とも符合させるという配慮を継承したという可能性も無いではない。

平声		入声	平声陽韻尾韻	摂
33 歌 a (k-)	≠	28 鐸 ak (d-)	cf.38 唐 aŋ (d-)	9 果 a ——入声 11 宕
歌: 古俄		鐸: 徒落	唐: 徒郎	
34 家 a (k-)	=	19 格 ak (k-)	cf.12 庚aŋ (k-)	10 假 a ——入声 12 梗
家(嘉: 古牙)		格: 古伯	庚: 古行	

但し一等韻小韻と二等韻小韻の間で同一声母の字を使用するということは切韻系韻書では通常見られない。同一声母の字を使用することで韻母の差異を際立たせるのはあくまでも重韻の関係にある韻の小韻同士間でのことである。

34 麻 a (m-)	=	19 陌 ak (m-)	10 假 a ——入声 12 梗
麻: 莫霞		陌: 莫白	

遠藤氏の想定する如くであったとして、反切上字が一致している訳であるから、ことさらに『韻詮』を持ち出すまでもないかも知れない。なお広韻のみならず切韻系韻書(切三、王一、王二、王三番)では均しく見母小韻の代表字は「家」ではなく、「嘉」となっている。そのため上の対照では見母小韻は()で括ってある。遠藤論文は一見、原本切韻の韻の配列の混乱と思われる現象に対する解釈の一端としてこのような見方を提示したのであり、陰声-入声の相配という考えを切韻全体に敷衍したという訳ではない。

太田『韻書と等韻図』Ⅰ pp.34-35 及びⅡ pp.175-176 で陰声と入声を対応させている例を挙げているが、既に述べたように『文鏡秘府論』所引『四声譜』で

は唐合-鐸合-歌合、齊-屑、支-質となっているのに、七音略第 25 転では豪-鐸（第 34 転で唐-鐸）となっており、文献により陰声-入声の相配のさせ方に不一致が見られる。切韻指掌図では陽声に入声を配すると同時に、陰声に入声を配する状況が広く見られるが、その音韻体系は曾-梗摂の合流、止摂支脂之微及び蟹摂齊祭韻の合流等、中古以降の大規模な韻の合流を反映しており、上の如く想定した原本切韻の前段階における陰声と入声の相配関係を考察する上で手掛かりとするには十分慎重であらねばならない。ちなみに大規模な韻の合流の一端を挙げると、切韻指掌図の舒-入相配例には歌-鐸、豪-鐸、唐-鐸の全てのみならず、唐-末も見られる。

試みに『文鏡秘府論』と七音略の例を盛り込むと以下ようになる。推定音価は開口のみ。

原本『切韻』（上田 1975 推定）

平声	去声	入声	撮
1 東 t-		1 屋 ʔ-	1 通 öuŋ/iəuŋ
2 冬 t-		2 沃 ʔ-	1 通 oŋ
3 鍾 tɕ-		3 燭 tɕ-	1 通 ioŋ
4 江 k-		4 覺 k-	2 江 auŋ
5 支 tɕ-		5 質 tɕ-7 櫛 tɕ- cf. 17 真 18 臻	3 止 ie——入声 6 臻 iět/iět
6 脂 tɕ-		5 質 tɕ-7 櫛 tɕ- cf. 17 真 18 臻	3 止 i——入声 6 臻 iět/iět
7 之 tɕ-		5 質 tɕ-7 櫛 tɕ- cf. 17 真 18 臻	3 止 iǎi——入声 6 臻 iět/iět
8 微 m-			3 止 iǎi
9 魚 ŋ-			4 遇 iə
10 虞 ŋ-			4 遇 yuǒ
11 模 m-			4 遇 o
12 泰 t ^h -			5 蟹 ai
12 齊 dz-			5 蟹 ei
14 祭 ts-			5 蟹 iei
13 佳 k-			5 蟹 ai
14 皆 k-			5 蟹 ei
17 夬 k-			5 蟹 ai
15 灰 h-			5 蟹 uai
16 哈 h-			5 蟹 ai
20 廢 p-			5 蟹 iai
17 真 tɕ-		5 質 tɕ-	6 臻 iěn

18 臻 tɕ-	7 櫛 tɕ-		6 臻 iɛn
19 文 m-	6 物 m-		6 臻 ʏɛn
20 殷 ʔ-	8 迄 h-		6 臻 iɛn
21 元 ɲ-	9 月 ɲ-		→7 山 iɛn
22 魂 fi-	10 沒 m-		6 臻 uən
23 痕 fi-			6 臻 ən
24 寒 fi-	11 末 m-		7 山 an
25 刪 ɕ-	13 鎋 fi-		7 山 an
26 山 ɕ-	12 黠 fi-		7 山 an
27 先 s-	14 屑 s-		7 山 en
28 仙 s-	15 薛 s-		7 山 iɛn
29 蕭 s-	16 錫 s-	cf.42 青 ts ^h -	8 效 eu—入声 12 梗 ek
30 宵 s-	17 昔 s-	cf. 41 清 ts ^h -	8 效 iɛu—入声 12 梗 ɾɛk/ iɛk
31 肴 fi-	18 麥 m-	cf. 40 耕 k-	8 效 au—入声 12 梗 ɐk
32 豪 fi-	28 鐸 d-	cf.38 唐 d-	9 效au—入声 11 宕 ak
			(七音略式)
33 歌 k-	28 鐸 d-	cf.38 唐 d-	9 果a —入声 11 宕 ak
			(四声譜式)
34 麻 m-	19 陌 m-	cf.39 庚 k-	10 假 a—入声 12 梗 ak
43 尤 fiɰ-			14 流 iəu
44 侯 fi-			14 流 əu
45 幽 ʔ-			14 流 iəu/ iəu
35 覃 d-	20 合 fi-		16 咸 (一等韻) ɛm
36 談 d-	21 盍 fi-		16 咸 (一等韻) am
51 咸 fi-	22 洽 fi-		16 咸 (二等韻) ɐm
52 銜 fi-	23 狎 fi-		16 咸 (二等韻) am
47 鹽 j-	24 葉 j-		16 咸 (三等韻) iɛm/iɛm
48 添 t ^h -	25 帖 t ^h -		16 咸 (四等韻) em
46 侵 ts ^h -	26 緝 ts ^h -		15 深 iɛm/ iɛm
37 陽 j-	27 藥 j-		11 宕 iay
38 唐 d-	28 鐸 d-		11 宕 ay —9 果 a
49 蒸 tɕ-	29 職 tɕ-		13 曾 B iɛɲ/ C iɛɲ
50 登 t-	30 德 t-		13 曾 əɲ
53 嚴 ɲ-	31 業 ɲ-		16 咸 (三等韻) iam
54 凡 b-	32 乏 b-		16 咸 (三等韻) iɛm

もし歌、麻を冒頭に移し入声韻と相配させるならば、34 麻-19 陌であれ、34 家-19 格であれ、梗摄入声のうち、19 陌(格)だけが他と切り離されて冒頭に置かれるということになる。28 鐸を 32 豪、33 歌のいずれに配すべきか。もし母音韻尾韻との組み合わせを重視するなら、七音略式つまり 32 豪-28 鐸をとるべきだろう。一等韻 33 歌-28 鐸、二等韻 34 麻-19 陌の対比を重視するなら、四声譜式をとることになる。あるいは両方ともということもあるか。切韻指掌図から推測するに、蟹摂-山摄入声、遇摂-通摄入声、流摂-曾摄入声を対応させていた可能性もあるが、後の-p, t, k 入声の合流を反映した可能性もあり、また早期文献に実例を見出すことができないので、上掲の一覧表では対応する入声を空欄にしてある。

一つの仮説として、韻書、韻図の編纂にあたり先ず、『四声譜』に見えるような陰-陽-入一貫の音韻の把握の仕方が先にあって、それを先ず入声を陽韻尾韻とも陰韻尾韻とも纏めて四声相配を確立させたが、後に同一字音が複数個所に出現するのを避けるため、入声は専ら陽韻尾韻とのみ組合せるようにしたという考えを提示しておきたい。このような考えは韻図については I p.35 で指摘したが、韻書も同様のことが言える。

今、『四声譜』の例をとって説明すると、

段階 I

皇 fuaŋ ^平	晃 fuaŋ ^上	璜 fuaŋ ^去	鑊 fuak ^入	禾 fua ^平	禍 fua ^上	和 fua ^去
光 kuɑŋ ^平	廣 kuɑŋ ^上	琯 kuɑŋ ^去	郭 kuak ^入	戈 kua ^平	果 kua ^上	過 kua ^去

といった一連の組み合わせを以下のように二つに分け、

段階 II

(唐-鐸韻)	皇 fuaŋ ^平	晃 fuaŋ ^上	璜 fuaŋ ^去	鑊 fuak ^入
(歌-鐸韻)	禾 fua ^平	禍 fua ^上	和 fua ^去	鑊 fuak ^入
(唐-鐸韻)	光 kuɑŋ ^平	廣 kuɑŋ ^上	琯 kuɑŋ ^去	郭 kuak ^入
(歌-鐸韻)	戈 kua ^平	果 kua ^上	過 kua ^去	郭 kuak ^入

として、然る後に入声韻を陽韻尾韻との対応に限定し、

段階 III

(唐-鐸韻)	皇 fuaŋ ^平	晃 fuaŋ ^上	璜 fuaŋ ^去	鑊 fuak ^入
(歌韻)	禾 fua ^平	禍 fua ^上	和 fua ^去	
(唐-鐸韻)	光 kuɑŋ ^平	廣 kuɑŋ ^上	琯 kuɑŋ ^去	郭 kuak ^入
(歌韻)	戈 kua ^平	果 kua ^上	過 kua ^去	

のようにするといったプロセスである。段階 III のようにすれば、韻書であれ、

韻図であれ、同一字音が複数個所で出現するという事態は解消される。七音略の第25転は**段階Ⅲ**へと改編される中で何故か**段階Ⅱ**が残ったものと考えられ、切韻指掌圖や四声等子に**段階Ⅱ**に後の韻の大規模な合流を生じた音韻体系を盛り込んだものと言えよう。もし33歌-28鐸、32豪-28鐸の両方を韻図に収めると、宕攝入声字は同一字音が三カ所の窠に現れることになり、容易に混乱を来たすことだろう。

結局のところ、陰声-入声という相配のさせ方を前提として論を進めても、原本切韻の韻目配列順の混乱と思しき状況を完全に説明し尽くすことはできない。遠藤氏の結論は『切韻』の前三分の二ほどの韻序は主に陽休之『韻略』により、東韻などからなる通・江攝を冒頭に置く転は呂靜の『韻集』により、その他は陽休之『韻略』以外の先行諸韻書によって韻序が定められた」(p.302; 52)というものであるが、韻序の配列の乱れを具体的、総合的に解明するには切韻内部の構造特徴に解明の糸口を見出すべきなのだろう。平山久雄先生の一連の論考、特に平山久雄 2014「陸法言《切韻》十卷稿本的假定及其藍本的探討」も参考とすべきである。

Ⅱ 注(5) p.164/20 『韻詮』の韻目(『悉曇藏』巻二に見えるのは平声のみ)の配列順は、……梵字の母音の配列順に合わせて、列順に合わせて、並べかえたという可能性もある。『韻詮』の韻目の配列順

原本切韻の韻目配列順は上田 1975 の推定の如くであったろうが、遠藤光暁 1989; 2001『切韻』の韻序について」は切韻が依拠した五家韻書の中、陽休之『韻略』は梵字摩多の配列順によっていたと推定する。但しこの書は混同しやすい韻だけをあげたもので、完全な韻書の形ではなかったという(p.302(115); 52)。なお遠藤氏の所説は切韻は五家韻書をいわばモザイクのように組み合わせたというものである。そして本補注直前の補注に示す如く、武玄之『韻詮』の韻目配列順は切韻の韻目を並べ替えたと言うよりも、陽休之『韻略』の流れを汲むものとするべきことになる。また平山久雄 2014「陸法言《切韻》十卷稿本的假定及其藍本的探討」も遠藤説を承け、独自の推定を行っている。それによれば、仏教に造詣の深かった周顒の『四声切韻』が梵字摩多式配列順で、五家韻書の一つ夏侯詠『四声韻略』もこのスタイルを襲っていて、切韻はこれを「藍本」として、その韻目順を説文解字に倣って、東から始まり、乏で終わるように改めたという。そうであれば、『韻詮』は『四声切韻』—『四声韻略』の流れを汲むものということになるだろう。

但し、『韻詮』においても、原本切韻には見られない韻目の増加、また「脂真

欣痕刪桓戈銜凡の九韻を減じ、…。而してその減じたるは皆廣韻の同用の中なる…」(大矢透『韻鏡考』p.68)というような韻目の増加、併合も見られるので、平山久雄 2014 の所説に従うにしても、『悉曇藏』所引『韻詮』が『四声切韻』或いは夏侯咏『四声韻略』を忠実に継承したものとは言えない。切韻以前の韻書は僅かな逸文を除き、今に伝わらないので、推測の域を出ないが、何らかの梵字摩多式配列順の韻書があって、『韻詮』はそれに独自の改訂を加えたと言うことなのだろう。これについては既に遠藤光暁 1989;2001 が「この韻序は『韻詮』のままである保障はない。『悉曇藏』この箇所的主旨は中国語の韻と摩多の引き当てにあり、『韻詮』の元の韻順とは拘りなく梵語の摩多の順に並べかえて引用した可能性がある…」(p.310(107);45-46) と指摘している。

II 注(5) p.164/21 …、この反切も『韻詮』に附されたものではないかもしれない。『韻詮』という書名

『新唐書藝文志』(劉昫、歐陽脩等撰、商務印書館点校本 1956) p.61 には「武玄之『韻銓』十五卷」と著録されており、百部叢書集成所収雅雨堂叢書本『北夢瑣言』の「李涪尚書改切韻」にも『韻銓』と出ている。新美寛編『本邦残存典籍による輯佚資料集成』の悉曇藏所引『韻詮』逸文では一部『韻銓』となっているが、所拠テキスト不明。大正蔵、寛文 12 年本ではいずれも『韻詮』となっている。馬淵和夫撰『悉曇学書選集』第一卷所収悉曇藏では一部『韻銓』となっているところがあるが、新美書と完全に一致している訳ではない。藤堂明保先生は『中国語音韻論』(新版、旧版とも)や『中国語学新辞典』p.204 で『韻銓』としている。本稿では通行している『韻詮』を採る。

II 注(5) p.166/6 (「武玄之『韻詮』の 50 韻と切韻諸本韻目対照表」の『韻詮』の韻目) 44 岑: 鋤簪

岑韻は韻詮のみに見られる韻目で、韻詮は平声の韻目とその反切しか伝わらないから、相配する上去入声韻がどうであったか分からない。これについて、森博達 1982 「武玄之「韻詮」の岑韻について」は大矢透『韻鏡考』の「三十八転(深摂、つまり侵韻とこれに相配する上去入声の転図——太田)の二等なる岑の一韻を増し、…」(p.68) という記述を引いた上で、「岑韻が侵韻の齒音二等(莊系)字であることを示唆したが、その根拠は示さなかった」(p.85) と述べ、臻・櫛韻(相配する上去声は無い——太田)が莊組字のみから成っていて、真-質韻と相補分布を成していることについて、陸志韋 1947;1971 『古音説略』

の方言により莊組字韻母の音価が或いは真韻相当、或いは殷韻相当とマチマチで異なっていたため独立させたとする説、平山久雄 1977「中古音重紐の音声的表現と声調との関係」のそり舌音声母と結合した場合の具体的な音声が他の真韻字と異なっていたため独立させているとする説を引き、深摂の侵韻と岑韻の関係もこれと同様であったのではないかと主張する。

Ⅱ 注(59) p.207/19 「昌來」の「來」は字形の似た尤韻字「柔」の誤写ではないか？

うかつにも余明象 1980 が「昌來」の「來」は「求」の誤りとする説を提示していることを見逃していた。森博達 1982「武玄之「韻詮」の岑韻について」を読み直す機会があり、その p.89 注(9)でこの説を紹介していることに最近になって気づいた。余明象 1980「《廣韻》札記一則」によれば、「𩇑」は尤韻「𩇑：赤周」小韻所属とされるべきということになる。上田正 1975 によれば、原本切韻の尤韻全 31 小韻のうち、「求」を反切下字に用いるものは 7 で、最多にして、最初の 3 小韻が全てこの字である。「𩇑」は集韻では哈韻「𩇑：昌來」（所属字はこの 1 字のみ）小韻にも見えるが（義注は「牛羊無子」）、尤韻「𩇑：蚩周」小韻に正しく収録されており、「𩇑 畜無子謂之𩇑」となっている。但し集韻には全部で 7 種の字音が挙がっており、他の 5 種は以下の通り。Ⅱ pp.206-207 で既に挙げているが、説明の便宜のために再録する。

哈韻「𩇑：當來」小韻中「𩇑 牛羊無子」
 宵韻「𩇑：蚩招」小韻中「𩇑 牛羊不生子也」
 豪韻「𩇑：他刀」小韻中「𩇑 牛羊無子也」
 豪韻「𩇑：徒刀」小韻中「𩇑𩇑 說文牛羊無子也。隸作𩇑」
 有韻「𩇑：去久」小韻中「𩇑 牛無子」

もし「𩇑：當來」小韻中「𩇑」が「昌來」をかく校訂した上でここに収めたものであるなら、尤韻の場合も集韻編纂時に「𩇑：昌來」をこれとは別個に「昌求」と校訂した上でこの反切から帰納される字音に相当するこの小韻に収録したという可能性が出て来るため、直ちに集韻が尤韻にこれを収録していることを以てそもそもが「𩇑：昌求」であったと考えるのは早急ということになる。

既に指摘したように哈韻「𩇑：昌來」は広韻のみに見える増加小韻である。Ⅱ 注(17) p.188/2-9 で紹介した古屋昭弘氏の一連の研究が明らかにしている通り、王三の又音反切の殆どは原本玉篇に由来するものであった。原本玉篇と一

致しない又音反切も何らかの先行小学書に見える反切を襲った可能性がある。今、その可能性を検証すべく、「昌來」が「昌求」、「昌柔」いずれの誤写の可能性が高いか、原本玉篇と經典釈文(陸徳明音)などにおける反切下字「求」、「柔」の使用状況をここでちょっと見てみよう。出現箇所の情報及び出現回数情報は省略。また直音の「音求」は調査対象としない。

上田正 1986b『玉篇反切総覧』pp.140-148 には以下の反切が挙がる：

𧈧：扶求
鳩：居求
猯：況求
𧈧：於求

邵榮芬 1995《《經典釋文》音系》pp.508-513 では以下の通り：

譚：竹求
旒駟梳鷄：力求
駟：側求
蒐度搜搜鄮鱸(𩺰)叟搜：所求
鳩：九求
丘區：去求
休髹麻秣：虛求
髹：香求
麻髹髹休：許求
尤：下求
優：於求

唐代文献の状況も同様である。上田正 1986a『玄応音義反切総覧』によれば、玄応音義に以下の例が挙がる：

蹂：仁求
究：居求
𧈧：於求

上田正 1987『慧琳音義反切総覧』に見える例では：

留：力求
搜：所求
𧈧：居求
鳩：許求

疣郵：有求

大島正二『唐代字音の研究』本文篇 pp.397-409 には以下の例が挙がる：

鄭：所求 漢書音義

搜颺洩：所求 文選音義

叟：所求 晉書音義

樛：居求 漢書音義

牛：魚求 晉書音義

休：許求 漢書音義

麀：於求 漢書音義

尤：羽求 文選音義

「柔」は直音注では使用例が見られるものの、下字としての使用例は上掲の文献いずれにおいても全く見当たらない。これに対し、「求」は直音注で現れる（「柔」より出現例は多い）のみならず、如上のように、珍しいものではない。恐らく六朝、隋唐代を通じてこの使用状況は一貫していたことであろう。

どうやら「昌來」を「昌柔」の誤りと見た太田の説は撤回し、余明象 1980 に従うべきようである。

Ⅱ 214/-13 「115/-8 …結合しないということである 【補注】軽唇音の韻母との共起制約」の2行目 例：「勳」fiào ←「勿要」。

なおこの字、字音は以前の『現代汉语词典』（例えば1983年第2版；1996年修訂第3版）には載っていたが、方言（具体的には吳方言）特有のものということで、後の版（例えば2005年第5版）では削除されてしまっている。何時の時点で削除されたか未確認。元々、方言音であることを示す＜方＞という表示はあった。

Ⅱ 217/7 「148/-2 韻には重紐の対立は無い 【補注】尤韻は重紐韻か？」の4行目 いずれも増加小韻で、軽唇音（！）。

重紐韻の唇音字はそもそも軽唇音化しない。軽唇音化するのは三等韻のうちのC類の唇音字である。切韻のC類韻唇音字にはまだ軽唇音化が起っていないと考えられるが、切韻に増加小韻が付け加えられるのは唐代以降のことで、その時点では既に軽唇音化は起こっていた。もし尤韻が重紐韻であるなら、この

二つの唇音小韻は軽唇音化していないはずである。尤-有-宥韻は東三同様、何故か次濁声母（明-微）に限って軽唇音化しないという奇妙な特徴を持つが、それ以外は体系的に軽唇音化を起こしていて、C 類韻の条件を満たしている。この次清声母字が例外的に次濁声母字同様に軽唇音化していないとは考え難い。

「愼：芳否」（王一、王二、王三「愼：芳酒」。いずれも「愼」が小韻代表字）には相配する去声宥韻の「副：敷救」小韻中に又音がある。この代表字「副」は現代音（普通話）で軽唇音化しているから、上声有韻所属の方も同様に軽唇音化していると考えられるべきだろう。興味深いことに上声有韻所属の音に附された義注は「小怒」、去声宥韻所属の方は「小怒也」と「也」の有無のみの違いである。切韻系韻書の中では広韻のみに見える有韻「𣎵：芳婦」（この字1字のみの小韻）も相配する平声尤韻「𣎵：匹尤」小韻中に又音がある。平声の字音は反切の字面から一見重唇音であるかのように見えるが、「匹」は主として重唇音字の反切上字に用いられるものの、稀ながら軽唇音字の反切上字としての用例もある（「芝：匹凡」、「湓：匹問」）ので、「𣎵：匹尤」もまた軽唇音声母とみなすべきだろう。この場合も上声有韻の方の釈文は「《爾雅》曰：一稌二米。此亦黑黍。漢和帝時，任城生黑黍，或三、四實，實二米，得黍三斛八斗是。芳婦切。又匹几、孚悲二切」（集韻では「愼：匹尤」小韻中にあり、釈文は「《字林》黑黍，一稌二米。」となっている）、平声の方は「一稌二米。又芳比切」となっていて、やはり上声と平声で意味に違いは無さそうである。上声の釈文末尾に言える又音はそれぞれ脂韻上声旨韻、脂韻で、どちらも重唇音。旨韻、脂韻の釈文はそれぞれ「一稌二米。又孚悲切」、「黑黍。一稌二米。又匹几切」で詳しさの程度は異なるものの、ここでも意味に違いは無さそうである。つまり字形、字義が同じで発音も似通っているということで（方言音かも知れない）、有韻字も重唇音声母と誤認されたという可能性がある。なお、韻鏡は「𣎵」を四等の段に置くが、七音略は三等に置く。七音略の処理が正しいとすべきである。

II 217/-8 「148/-2 韻には重紐の対立は無い 【補注】尤韻は重紐韻か？」の24行目 …、集韻の「羌幽切」がそれに該当する反切とする。

この部分、説明が簡単すぎたので、補足しておく。尤韻の二つの溪母小韻は、両方とも切三、王一、王二、王三、広韻で確認できるから、原本切韻の段階からどちらもあった可能性が高い。これについて董同龢 1948「廣韻重紐試釋」、『中央研究院歷史語言研究所集刊』第13本, pp.1-20は韻鏡、七音略共に「𣎵」を他の幽韻字同様に四等の段に置くこと、集韻が広韻の旧を襲って、「𣎵𣎵段」を尤韻に収録すると同時に「𣎵」を幽韻「區：羌（揚州使院重刻本に拠る。宋

刻集韻は異体字「羗」に作る。)幽」小韻中に収めていること(但しこの小韻中に「休殷」は見えない)、幽韻字は見、群、疑母小韻はあるのに溪母小韻を欠いていること等から、切韻の「惆：去愁」(広韻「休(>)咻)：去秋」)は本来幽韻所屬字であるものが、誤って尤韻に紛れ込んだもので、反切もその際に尤韻相当となるように変えられてしまったのだろうと言う(p.17)。幽韻小韻の反切を見ると、切三、王三に「彪：甫休」(王二は「彪：補休」といった例がある。「休」は尤韻字で切三、王一、王二、王三、広韻いずれにおいても小韻代表字(「休：許尤」)となっており、幽韻に又音がある訳ではない。そもそもは「然」の省体として「休」が用いられることがあったであろうことから来るものと思われる。こういった一見、尤-幽通用を示すような例が実際に存在するから、董同龢の主張には十分な説得力がある。なお広韻では「彪：甫然」と校訂されている。

Ⅱ224/-2 31.4.蒸韻の類相関の「199/-11 …牙喉音は開合で帰類を異にしている 【補注】蒸韻の帰類はどのように判断されたか」の4行目 但し、一部B類あり

上田 1975 は蒸-拯-證-職韻(以下、特に分けて言及する必要が無ければ、平声蒸韻で代表させる)牙喉音開口小韻は職韻の「憶：於力」をAとする以外、相配する平、上、去声を含め、全てBとしている。以下で言及するもう一つの職韻影母小韻「抑：於棘」もB扱いとしている。なお既に指摘したように、平、上、去声の牙喉音小韻に合口のものは無い。上田氏は唇音が軽唇音化しないことから、蒸韻を重紐韻と判断したのであろう。そして韻鏡で開口及び合口、全ての牙喉音字が一律三等に配されているところから、B類相当としたものか。上田 1975 には、唇牙喉音小韻の中でC類とするものは無い。韻図は影母については、「憶：於力」を三等に置き、「抑：於棘」は転図上に現れない。判断の具体的根拠について上田氏は他の論文においても語られたことは無いように思う。

以下、本稿が依拠する平山 1966 及び平山 1972 の所説の概要を紹介する。平山 1966 では蒸職韻の唇音字及び合口牙喉音字(後者は職韻のみ)が類相関から見てB類の性質を持つのに対し、開口牙喉音声母字は反切上字にA,B類字が全く見られないことから、一律C類としていた。その後、基づいた李榮 1952;1956 『切韻音系』で影母「抑：於棘」が増加小韻扱いされて削除されていたことから、これを加えた上で平山 1972 で再検討を加え、修正を行った。それによれば、広韻では「憶：於力」小韻に併合されているが、原本切韻においては「憶：於力」と「抑：於棘」はC:Bと他に例を見ないような、一韻中における重紐韻：非重紐韻の対立を成していた。切韻のみに基づく限りはここまでしか分からな

い。後者を B とする論拠として平山 1972 は敦煌毛詩音で反切下字の使用に関し、B 類には唇音字（氷逼）や正齒音二等字（色）、C 類には来母字（力）といった違いが見られることを挙げている。そして、職韻の見母小韻「殫：紀力」はこの一つのみであり、B 類反切下字と考えられる「棘」がこの小韻に所属していることから、この小韻もまた B 類とした。実のところ、C 類反切下字に多用される「力」がこの見母 B と認定した小韻においても下字として使用されており、この見母小韻を B 類相当とみなすことの論拠にやや苦慮し、切韻の見母小韻は C 類の「亟」諧声系（A：標準音；または現実に有力な音）と B 類の「棘」諧声系（B：通俗音；または obsolete な音）が前者に纏められた形になっているものと説明した（p.79）。そして、敦煌毛詩音では類相関の観点から、職韻見母小韻に B：C の対立が認められるばかりでなく、そこに現れる平声蒸韻見母、疑母字も B 類と考えられ、平山 1966 では増加小韻につき考察の対象外としていた、切韻平声蒸韻の「𪛗：綺競」（上字 B）もまた B 類と見做されることを指摘した（pp.82-84）。なお、平山説では蒸-職韻に A 類は皆無。

今、太田なりに影母小韻の合併状況を見てみよう。原本切韻では分けていて、広韻で二者を合併しており、原本切韻推定原文（李永富 1973『切韻輯斟』による）と広韻の該当箇所は以下の通り。下線を付した部分は B 類由来であることを示す。

原本切韻推定原文	C 憶 於力反。九 臆 億 臆 臆 臆 臆 臆 臆
	B <u>抑</u> 於棘反。一
廣韻	憶 於力切。十七 億 臆 (臆 音) 臆 臆 臆 臆 (蓄 臆 臆) 臆 (檣) <u>抑</u> (<u>抑</u> 臆)

広韻（ ）内は増加字。この合併により「抑(抑)」は広韻において B 類から C 類へと所属が変わってしまった。なお末尾の「臆」はその諧声符から見てそもそも C 類と考えられる。恐らくその前の C 部分と B 部分が接合された後に新たに加えられたものだろう。「意」の諧声系列が上古之部入声であるのに対し、「抑」が脂部入声と所属を異にしているのも有力な論拠となっている。

では見母小韻の方はどうか？原本切韻の段階で上に示した影母小韻の場合同様、二つの小韻の合併が行われたということはないのか？遺憾ながら段玉裁『六書音韻表』（5 卷（音韻學叢書），廣文書局影印本，1966；初刻単行本の刊行年は 1777。音韻學叢書本との間の異同は未詳）で見る限り、「棘」には「棘域息」（葛生二章）と中古云母合口 B と考えられる「域」との押韻が見られる一方で、「棘食國極」（園有桃二章）、「翼棘稷食極」（唐鴟羽二章）、「棘稷翼億食祀洧福」（楚

茨一章)、「棘極國」(青蠅二章)、「棘極」(江漢三章)と、中古で C とされる「億」、「極」との間の押韻情況も見られ、影母小韻の場合と異なり、中古職韻見母字では上古における明瞭な諧声符毎の差異は見られない。

ならば循環論的に全体の整合性を求めて、逆に切韻における接合と想定する余地のある状況から、見母小韻を二つに分け、上古分部にはその差異が十分に反映していないというふうに見直してみる余地がないか？ 諧声符「亟」の系列は C (<之部入声)、「棘」の系列は「抑」と同類と見なして B (脂部入声) と修正するということであるが、さすがにこれは無理があると白状せざるを得ない。しかしながら、集韻職韻の記載を見ると、「棘」の異体字として「亦省」と注記されて「束」が挙がっており、「束」は「棘」の省体として用いられることがあるということが分かる。「棘」は之部入声であるが、「束」は佳部陰声で、「蓓策」(佳部入声→麦韻)、「速刺速涑」(佳部入声→昔韻)といった例が見られることから想像を逞しくすると、或いは上古では「亟」系と「棘」系で帰属に違いが無いのに、上中古において後者の諧声符となっている「棘」そのもの及び「𣎵」(広韻によれば「𣎵」、「𣎵」も)は「束」系扱いされて、一度他の「棘」系とは異なる変化をしたが、中古になって再び「棘」系と見なされることになって、元の所属に戻るという、通常では想定し難い例外的な音韻変化があったということなのかも知れない。また或いは方言によってこのような差異があったが、後の規範音たる中古音ではこの区別が明瞭な形で採用されるどころとならなかった。このような解釈が成り立つなら、職韻見母 C : B の対立に至るプロセスについてはなおも十分な説明ができていないが、一応の論拠をもって「棘」が「抑」の反切下字としては B 類、「億」小韻に所属するという点では C 類という一貫性の欠如を解消できよう。

今、仮に見母 C の本来の反切を切韻系韻書に見られる「紀力」で代表させ、平山 1972 で指摘されている見母 B 相当小韻を他文献でそれと確認できる反切「居抑」、「羈力」(ともに篆隸万象名義)、「京色」(毛詩音)のうち「居抑」で代表させるとすれば、李永富 1973 の推定切韻原文を基にして、以下のような合併過程を想定できる。なお小韻代表字、そこに附された反切、同音字数、収録同音字のみ記し、釈文は省略する。下線の違いで C 由来 (〰) か B 由来 (〱) かの違いを示した。

原本切韻前	C { <u>𣎵(*紀*力反。四) 𣎵</u> }
	B { <u>𣎵: *居*抑反。 棘</u> }
推定切韻原文	<u>𣎵(紀力反。四) 𣎵</u> <u>𣎵 棘</u>
	C C<B

或いは「*居*抑」ではなく、「*羈*力」（上字 B）であったということならば、反切下字が共通していたことが二者の合併を容易にしたと考えることも可能である。

以上のような解釈が成り立つならば、広韻でそれ以前の切韻系韻書で分けていた影母 B, C 二小韻を C として合併したことと同様の処理が五家韻書を基に原本切韻編纂時に見母小韻において既に行われていたということになる。これにより影母「抑：於棘反」は $C+B \rightarrow B$ と見なされ、見母「襍：*居*抑」、疑母「疑：魚抑」と系聯して一類（B）を為すことになる。なお原本切韻疑母の反切用字について、上田 1975 は「疑：魚力」と推定するが、今、李永富 1973 に従う。

なお太田 2014 は原本切韻における重紐韻の合併の事例は、宵韻去声笑韻においても見られ、疑 A、B 二小韻が A として合併されたと推定している (p.41)。

参考文献

日本語（アイウエオ順）

- 上田正 1975 『切韻諸本反切総覧』, 京都, 均社, 222p.
 上田正 1986a 『玄応音義反切総覧』, 自家版, 280p.
 上田正 1986b 『玉篇反切総覧』, 自家版, 563p.
 上田正 1987 『慧琳音義反切総覧』, 汲古書院, 254+1p.
 遠藤光暁 1989;2001 「『切韻』の韻序について」, 『藝文研究』 54, 慶応義塾大学
 藝文学会, 1989.3, pp.312(105)-299(118)118; 『中国音韻学論集』, 白帝社,
 348p., pp.44-53
 大島正二 1981 『唐代字音の研究』, 汲古書院, 本文篇, 363+759p.; 資料索引, 758p.
 太田斎 2013 『韻書と等韻図 I』 (神戸市外国語大学 研究叢書 第52冊), 神戸
 市外国語大学外国学研究所, 258p.
 太田斎 2014 「疑母重紐A類小韻試論 附論 云母との相補性」, 『開篇』 Vol.33,
 pp.38-60
 太田斎 2016 「韻書と等韻図 II」, 神戸市外国語大学外国学研究所 『外国学研究』
 第92号), 神戸市外国語大学外国学研究所, 2016.12., pp.145-246
 平山久雄 1966 「切韻における蒸職韻と之韻の音価」 『東洋学報』 49-1, pp.42-68
 平山久雄 1972 「切韻における蒸職韻開口牙喉音の音価」, 『東洋学報』 55-2,
 pp.64-94
 平山久雄 1977 「中古音重紐の音声的表現と声調との関係」, 『東洋文化研究所
 紀要』 73, pp.1-42
 森博達 1982 「武玄之「韻詮」の岑韻について」, 『外国文学研究』 33・34 合併
 号, pp.81-90

中国語（ピンイン順）

- 段玉裁 1777; 1966 《六書音韻表》 5 卷(音韻學叢書), 廣文書局影印本 (1777 は初
 刻単行本の刊行年。音韻学叢書本との間の異同は未詳)
 董同龢 1948 〈廣韻重紐試釋〉, 《中央研究院歷史語言研究所集刊》 第 13 本, 1-20
 頁
 董同龢 1968 《漢語音韻學》, 王守京發行, 330 頁
 董同龢 1954 《中國語音史》 (現代國民基本知識叢書第二輯), 中國文化文化出版
 事業委員會, 130+4 頁
 董同龢 1944; 1948 《上古音韻表稿》, 中央研究院單刊甲種之二十一, 石印本(未見);

- 《中央研究院歷史語言研究所集刊》第十八本, 1-249 頁
- 邵榮芬 1995 《〈經典釋文〉音系》, 台北, 學海出版社, 541 頁
- 魏建功 1957 〈切韻韻目次第考源〉, 《北京大學學報(人文科學)》, 1957 年 4 期, 69-83 頁
- 魏建功 1957 〈切韻韻目四聲不一貫的解〉, 《北京大學學報(人文科學)》, 1958 年 2 期, 45-67 頁
- 李榮 1952; 1956 《切韻音系》, 科學出版社, 182 頁 (第一版, 中國科學院, 182 頁)
- 李永富 1973 《切韻輯韻》, 藝文印書館, 線裝 8 冊
- 龍宇純 1970 〈廣韻重紐音值試論兼論幽韻及喻母音值〉, 《崇基學報》9-2, 161-181 頁
- 陸志韋 1947; 1971 《古音說略》, 哈佛燕京學社; 臺灣學生書局影印
- 平山久雄(HIRAYAMA Hisao)2014 〈陆法言《切韵》十卷稿本的假定及其藍本的探討〉, 《語言學論叢》第 50 輯, 北京大學中國語言學中心《語言學論叢》編委會, 商務印書館, 209-236 頁
- 余明象 1980 〈《廣韻》札記一則〉, 《中國語文》1980 年第 5 期, 第 347 頁

韻書と等韻図 I 正誤表 (続)

頁/行	誤	正
35/8	張 tɕiaŋ ^平 長 tɕiaŋ ^上 悵 tɕiaŋ ^去 著 tɕiak	知 tɕiē ^平 伽 tɕiē ^上 智 tɕiē ^去 室 tɕiēt ^平
	→ 張 tɕiaŋ ^平 長 tɕiaŋ ^上 悵 tɕiaŋ ^去 著 tɕiak ^入	知 tɕiē ^平 伽 tɕiē ^上 智 tɕiē ^去 室 tɕiēt ^入
201/10	と断を入れたのは	→ と断りを入れたのは
211/-8~-7	しかし王三 (完本王韻との略称もあり) …	
	→ しかし「故宮本王韻」(王二のこと。具体的には明、項子京跋本『王仁昫刊謬補缺切韻』を指す。周祖謨 1983『唐五代韻所集存』中華所局の言う「裴務齊正字本刊謬補缺切韻」) …	

韻書と等韻図 II 正誤表

頁/行	誤	正
147/17 (注(4))	日本訳: →	日訳:
179/-11 (注(13))	「蓋:公」、→	「蓋:公艾」、
181/5 (注(13))	「一百廿喃部」→	「一百廿受部」
181/19 (注(13))	訳: →	日訳:
182/21(-15) (注(13))	訳: →	日訳:
182/-5 (注(13))	訳: →	日訳:
183/10-11 (注(13))	『文鏡秘府論調』『四声譜』→	『文鏡秘府論』『調四声譜』
183/11 (注(13))	『韻鏡』序 →	『韻鏡』『序』
184/-9 (注(13))	「XAB」で事足りるのに「X 音 AB」と→	「XAB 反/切」 で事足りるのに「X 音 AB 反/切」と
190/-7 (注(24))	「九弄図」は元刊本玉篇の巻頭などに見える。→	「九 弄図」は宋本玉篇巻末、元刊本玉篇の巻頭などに見える。
198/-9 (注(38))	見なすことにもまた問 →	見なすことには問
199/-6 (注(41))	その上、去声の字は →	その上声、去声の字は
213/-7 (「69/18 諸方言に実例がある 【補注】非:敷の対立」の9行目)	非:敷の対立 →	非敷:奉の対立
214/-14 (「115/-8 …結合しないということである 【補注】軽唇音の韻母との共起制約」の2行目)		f, v は単母音 i とは結び付くが、i 介音及び y 介音 (=i+u)

と結びつくことはないようである。 → f, v は単母音
i, u とは結び付くが、単母音 y、i 介音、u 介音、y 介音 (= i+u) と結びつくことはないようである。

- 217/-12 (「韻には重紐の対立は無い 【補注】尤韻は重韻か?」の 20 行目)
平声の例は上田 1975 の推定では → 平声の例は上田
1975, p.61 の推定では
- 217/-4 江南読書音では尤韻と幽韻を区別しない。 → 江南読書音では尤韻と
幽韻を区別しない。
- 217/-3 (「韻には重紐の対立は無い 【補注】尤韻は重韻か?」の 29 行目)
尤韻は他に重紐 → 尤韻には他に重紐
- 220/-5 (「180/-15 …という小韻が見られる。 【補注】「涇：初井反」は誤
字に関わる実在しなかった小韻」の 24 行目)
「涇」もしくは「淫」に → 「涇」もしくは「淫」に
- 224/-2 (「199/-11 …牙喉音は開合で帰類を異にしている 【補注】蒸韻の帰
類はどのように判断されたか」の 4 行目)
但し、一部 A 類あり。 → 但し、一部 B 類あり。
- 225/-15 (「203/-8 になるだろうという予想だけは立つ 【補注】広韻反切の
みに基づく幽韻の類相関」この行自体)
202/-8 になるだろうという予想だけは立つ 【補注】広
韻反切のみに基づく幽韻の類相関 → 203/-4 混乱して
しまうのである 【補注】広韻反切のみに基づく幽韻の類
相関
- 226/-8 (「204/12 いる 【補注】明母非輕唇音化贅言」この行自体)
いる → いる。

この他、弁解の辞で述べた、例えば参考文献の提示における、上田正 1975、上
田正(1975)のような不統一や、書誌でデータを表示するにあたってのカンマの
全角か半角かの違いは一々挙げない。

Keywords: Chinese Historical Phonology Rhyme Dictionaries Rhyme Table